【別添１】

４０	福津市立上西郷小学校	R1～R5

令和５年度研究開発実施報告書（要約）

１　研究開発課題

「英語力」「対話力」向上に向けた，新教科「英会話科」，新領域「ダイアログの時間」の開発 −個の学習到達度や学習課題に応じた異学年協働学習を通して−

２　研究の概要

Society5.0における求められる力である「英語力」「対話力」を育成するための教育課程の実効性を高める。具体的には「Ⅰ英会話科・ダイアログの時間の新教科・領域の設定」，「Ⅱ目的や学習課題等に応じた異学年集団の協働学習」，「Ⅲ学びの個別最適化」である。

３　研究の目的と仮説等

（１）研究仮説

Society5.0における求められる力である「英語力」「対話力」が高まった子供を育成するために，２つの新教科・領域において，以下の３つの視点から実践を行う。

○ 新教科「英会話科」，新領域「ダイアログの時間」の教育課程の新設
○ 目的や学習課題等に応じた協働学習（異学年学習，小集団グループ，多様な他者との対話活動）
○ 学びの個別最適化（個の学習到達度，個々の選択，ICTの活用による自己・他者評価等）

このことにより，Society5.0に向けて求められる力である「英語力」「対話力」を育成する新教科・領域の効果とともに，目的や学習課題に応じた異学年協働学習，これまでの同一学年での一斉一律の授業から脱却する異学年協働学習の在り方を明らかにすることができると考える。

また，このことは，グローバル化が進展する中で，英語・日本語を用いてコミュニケーションすることの価値と，これからの学校教育における学習の在り方の転換に資することができると考える。

（２）教育課程の特例

①　目標と内容、授業時数

「英会話科」

○目標

英語によるコミュニケーションを円滑にする上で必要な見方・考え方を働かせ，実際のやり取りを通して伝え合う楽しさを味わい，主体的に英語によるコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

○指導内容

第１学年及び第２学年・・・小学校学習指導要領外国語活動内容相当
第３学年及び第４学年・・・小学校学習指導要領外国語科の内容相当
第５学年及び第６学年・・・小学校学習指導要領外国語科の内容相当、
中学校学習指導要領外国語科１，２年生相当

○授業時数

・第１学年・・・・・・・・・年間　３４単位時間
・第２学年・・・・・・・・・年間　７０単位時間
・第３学年及び第４学年・・・年間　７０単位時間
・第５学年及び第６学年・・・年間１０５単位時間

【表1】英会話における「領域別目標到達度一覧

	低学年	中学年	高学年
聴くこと	（1）ゆっくりはっきり話されれば，身近な人やものについて，簡単な語句を聴き取ることができる。 （2）目的に応じて相手の話を「聴き手スキル」を発揮しながら聴き，反応を返すことができる。 （3）意味が分からなかったとき，そのままにせず，分からないことを伝えようとする。	（1）　ゆっくりはっきり話されれば，身近で簡単な事柄に関する基本的な表現を聴き取ることができる。 （2）相手の話を「聴き手スキル」を発揮しながら聴き，内容に応じて簡単な英語で反応を返すことができる。 （3）　意味が分からなかったとき，尋ねるなどして分かるまで聴こうとする。	（1）ゆっくりはっきり話されれば，身近で簡単な事柄について，基本的な情報や話の概要を理解することができる。 （2）相手の話を「聴き手スキル」を発揮しながら聴き，簡単な英語で反応したり，聴き取った語句を繰り返したりすることができる。 （3）意味が分からなかったとき，聴き返したり，予想した語句で言い換えたりして，分かるまで聴こうとする。
話すこと〔発表〕	（1）身の回りのことや興味のあることに関する簡単な情報や気持ちを基本的な表現を用いて話すことができる。 （2）相手の様子や気持ちを考えながら，目的に応じて「話し手スキル」を発揮しながら，話すことができる。 （3）自分が伝えたいことを多様な方法で，相手に伝えようとする。	（1）自分のことや地域に関する事柄等について，考えと理由，考えと具体的説明といった内容を加えて基本的な表現を用いて話すことができる。 （2）相手や目的，場や状況に応じて，「話し手スキル」を発揮しながら，伝え方（速さ，声の大きさ，身振り等）を変えて話すことができる。 （3）自分が伝えたいことを多様な方法で，相手に伝えようとする。	（1）自分のことや興味のあること，地域，日本に関する事柄等について，順序や資料を工夫しながら，基本的な表現を用いて話すことができる。 （2）相手や目的，場や状況に応じて，「話し手スキル」を発揮しながら，伝え方（使う語句，資料等）を工夫しながら話すことができる。 （3）自分が伝えたいことを多様な方法で，相手に伝えようとする。
話すこと〔やり取り〕	（1）英語で簡単な挨拶や返事をすることができる。 （2）身の回りのことや興味のあることについて，伝えたり簡単な質問に答えたりすることができる。 （3）相手の様子や気持ちに気をつけ，英語での会話を楽しもうとする。	（1）英語で簡単な自己紹介や挨拶，感謝の気持ちを伝えることができる。 （2）好きなものや興味のあること，互いの地域の特徴など，共通の話題について，伝え合ったり質問をし合ったりすることができる。 （3）相手の様子や気持ち，目的を意識しながら，楽しく会話を続けようとしている。	（1）初めて会った人に，英語で簡単な自己紹介や挨拶をしたり，相手の自己紹介に英語で反応したりすることができる。 （2）好きなものや興味のあること，互いの国の特徴など，共通の話題について，伝え合ったり質問をし合ったりすることができる。 （3）相手の様子や気持ち，目的を意識しながら楽しく会話を続け，分かり合おうとしている。

「ダイアログの時間」

○目標

多様な他者との対話活動を通して，相手の話を傾聴し，相手の立場に立って考えたり，よりよい価値観を見出したりする力，及び，円滑にコミュニケーションを進める対話スキルを身に付け，活用することができるようにする。

○指導内容

・対話スキル学習　（モジュール：１１時間，ロング：１１時間）

第１学年及び第２学年・・・対話スキル（話し方，聴き方，アサーション）

第３学年及び第４学年・・・対話スキル（傾聴の仕方，質問の仕方，プレゼンテーション）

第５学年及び第６学年・・・対話スキル（キャリブレーション，バックトラッキング，反映的傾聴）

・対話学習　（３時間＋教科・領域等での時数）

第１学年及び第２学年・・・保育園・幼稚園児，地域の高齢者との交流（園児交流会の計画・交流，昔遊び，感謝の会等）

第３学年及び第４学年・・・地域・環境に関わる人々との交流（GT との対話活動・西郷川を守る会議）

第５学年及び第６学年・・・ALT 等との国際交流，地域の人々との交流（トークフォークダンス，ふるさとを語る会等）

異学年縦割りグループ・・・縦割り遊び，学期ごとのめあて決めと振り返り

○授業時数

・第１・２学年・・・・年間２４単位時間（うち１１時間はモジュール）

・第３～６学年・・・・年間２５単位時間（うち１１時間はモジュール）

【表２】　ダイアログの時間における領域別目標到達度一覧表

領域	スキル	低学年	中学年	高学年
聴くこと	聴き手スキル	【ア】相手の話を受け入れる聴き方ができる。 「(ポ)パワーアップ話し方」 ①していることをやめて，相手を見て ②最後まで ③反応しながら(身振り，手振り，表情) ④相手を認めて ※レベル順に指導 【イ】相手の話を聴いて，質問をすることができる。「(ポ)質問のまきしお」 【ウ】相手の話を聴いて，反応することができる(事実のバックトラッキング)。	【ア】聴き方のポイントを意識し，相手の立場にたって聴くことができる。 (どのレベルまでできているのかを意識) 【イ】相手の顔色や表情・姿勢などを観察しながら聴くことができる。「(ポ)しかのこま」 【ウ】相手の話を聴いて，反応することができる(事実と気持ちのバックトラッキング)。	【ア】聴き方のポイントを意識し，相手に反応しながら聴くことができる。 (どのレベルまでできているのか意識) 【イ】相手の顔色や表情・姿勢などを観察しながら聴くことができる(キャリアブレーション)。 【ウ】相手の話を聴いて，要約しながら，反応することができる(事実と気持ちのバックトラッキング)。
話すこと	話し手スキル	【ア】相手に伝わる話し方ができる。 「(ポ)パワーアップ話し方」 ①相手を見て ②伝わる声の大きさで ③伝わる速さで ④最後まではっきりと 【イ】5W1H を意識して話す。 「(ポ)いつ(When)，どこで(Where)，誰が(Who)，何を(What)，なぜ(Why)，どのように(How)」 【ウ】事柄の順序に気を付けて，考えをつくることができる。「(ポ)相手に伝わりやすくするための順序,初め-中-終わりを意識」	【ア】相手に伝わる話し方のポイントを意識して，話すことができる。 ①～④＋ ⑤絵や図を見せて (どのレベルまでできているのか意識) 【イ】話の中心を意識して話すことができる。 【ウ】資料を活用して話すことができる。 【エ】自分の考えを提案することができる。 【オ】相手に伝わりやすくするために，話の中心に気を付けて，スピーチの内容をつくることができる。 【カ】プレゼンテーションの仕方を理解することができる(プレゼンテーションスキル)。	【ア】相手に伝わる話し方のポイントを意識して，話すことができる。 【イ】インタビューしたことを報告することができる。 【ウ】自分の考えを相手の理解度に応じて提案することができる。 【エ】事実と意見・感想を区別してスピーチ内容を考えることができる。 【オ】やり取りのあるプレゼンテーションをすることができる(プレゼンテーションスキル)。
話し合うこと	話合いスキル	【ア】話題に沿って話し合いを進めることができる。	【ア】互いの意見の共通点や相違点に着目しながら，目的に応じて話し合いを進めることができる。 【イ】ワールドカフェの仕方を知り，活用することができる。「(ポ)ひじのな」	【ア】互いの立場や意図を明確にしながら，目的に応じて，計画的に話し合いを進めることができる。 【イ】ブレーンストーミング・ファシリテーションの仕方を知り，活用することができる。 「(ポ)ヒカジリ」
関係づくり	対人関係スキル	【ア】挨拶のしかたを知り，生活の中で活用することができる。 (ポ)気持ちのよい挨拶 ①たちどまって ②相手を見て ③元気よく※③は中学校区統一 【イ】自己紹介をすることができる。 「(ポ)はちのあき」 【ウ】ストレスを知り，対処法を考えることができる。 【エ】ふわふわ言葉・ちくちく言葉について考え，学校生活で使うことができる。 「(ポ)I メッセージ」 【オ】自分も相手も大事にして自分の気持ちを変えて伝える言い方(アサーション)ができる。「(ポ)やさしい，いいて」	【ア】挨拶のしかたを知り，生活の中で活用することができる。 (ポ)気持ちのよい挨拶 ①～③＋ ④心をこめて (どのレベルまでできているのか意識) 【エ】自分の気持ちを切り変えて伝える言い方を知り，自分の気持ちを場面に応じて伝えることができる。「(ポ)I メッセージ」 【オ】友達への声のかけ方を場面や状況に応じて伝えることができる(断るときのアサーション)。「(ポ)断るのは，こわかー」 【カ】怒りや衝動を感じたときの落ち着かせ方を理解し，活用することができる。 「(ポ)心の信号機」	【ア】挨拶のしかたを知り，生活の中で活用することができる。 (ポ)気持ちのよい挨拶 ①～④＋ ⑤自分からはっきり (どのレベルまでできているのか意識) 【エ】自分の気持ちを場面や相手に応じて伝えることができる。「(ポ)I メッセージ」 【オ】友達への声のかけ方を場面や状況に応じて伝えることができる(話し合うときのアサーション)。「(ポ)きじか」 【カ】ストレスの解消やトラブルの解決の仕方を理解し，活用することができる。 「(ポ)トラブル解決 4 兄弟」

※表記の仕方　【聴―低―ア】：聴き手スキル―低学年―【ア】相手の話を受け入れる聴き方ができる。

４　研究内容

（１）教育過程の内容

①　英会話科

ア　英会話科の内容と形態等について

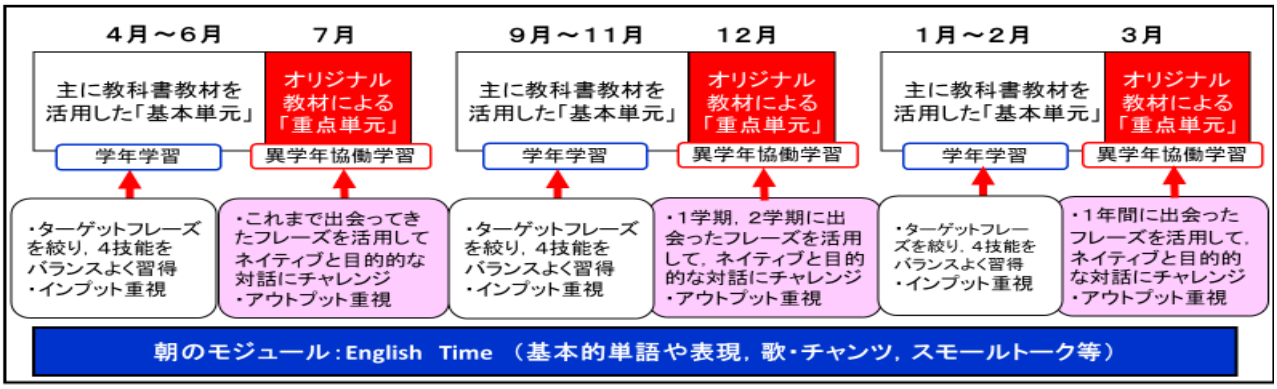
英会話に関する時間を English Time（モジュール），学年学習，異学年協働学習から構成する。主な内容や授業時数等は，表３の通りである。

【表3】英会話科授業の内容と方法

	English Time(モジュール)	学年学習 (基本単元)	異学年協働学習 (重点単元)
主な 活動内容	・歌　・チャンツ ・スモールトーク ・語彙やフレーズ復習	・主に教科書教材を活用した４技能の習得	・ダイアログの対話スキルを活用した学習
授業 時数	・15 分×2 回/週 年 20 時間程度	・1 年　　15 時間 ・2，3，4 年 40 時間程度 ・5，6 年 75 時間程度	・1 年 4 時間程度 2，3，4 年 10 時間程度 ・5，6 年　10 時間程度
学習 形態	全体，ペア	・学習内容に応じた必要な単語や表現を繰り返し練習する学習 ・全体，ペア，小集団(到達度別，課題別)	・個の到達度に合わせた異学年のグルーピングによる学習 ・全体，ペア，小集団(到達度別，課題別) ※GT,地域の方，ALT 等との交流活動をする
Input と Output の関係	Input＞Output	Input≦Output	Input＜Output

・基本単元（学年学習）　　：教科書教材を主に活用し，新しく出会ったフレーズを繰り返し使いながら習得する。

・重点単元（異学年協働学習）：これまで学んだフレーズを活用して，ネイティブとの対話にチャレンジし実践的な英会話力の習得や英語コミュニケーションの楽しさを味わう。



【図１】単元配列の考え方

イ　朝の English Time（モジュール）におけるスキル学習

週２回，モジュールとして行う「English Time」は，表３の流れで進め，英会話におけるスキルの向上を図る。研究４年次では，「フォニックスやコミュニケーションを練習する曜日」「自分の課題から教材を選び，ICT を用いて個別学習をする曜日」等，曜日によって内容を変更し，英会話の基礎となる発声・発音の力や，進んで会話を続けようとするコミュニケーション力を育てる。

【表4】朝のモジュールのスキル学習の流れ

流れ	内容	方法	教材
1 あいさつ	How are you? 日付・曜日・天気等	ALT による全校放送	
2 歌	月替わり 全学年共通	担当が Class room に教材を提示。 各教室での動画の視聴	外国の童謡や子供になじみのある歌 フォニックスソング
3 スキル トレーニング	英会話科で取り扱う単語や表現の聴き取りや発話	リスニング チャンツ シャドーイング ゲーム等	ナビマ，モジュール 105 ジョリーフォニックス デジタル教科書の資料 カラオケ English 自作教材等
4 コミュニケーション	会話を続けるためのコミュニケーションのトレーニング	担任がテーマを設定教師と全員 教師と子供 子供と子供	自作教材「上小英語力５STEPS」等

② ダイアログの時間

ア　ダイアログの時間の内容と形態等について

「対話スキル学習」は，他者とコミュニケーションする上での必要な対話スキルトレーニング(話し方，聴き方，アサーション等)で構成する。また，「対話学習」は，一つのテーマに対して，複数での対話や，プレゼンテーション及びディスカッションで構成する。以下に，対話学習と対話スキル学習の内容例を示す(表５)。

【表５】　対話スキル学習と対話学習の内容　※○…活動　（　　）…方法，内容

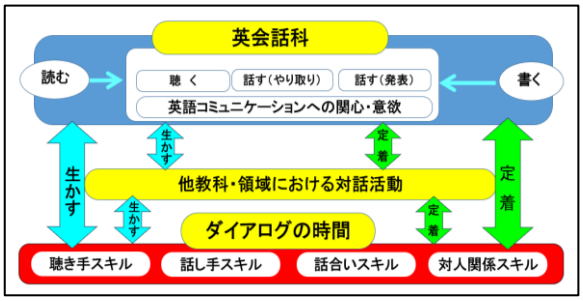
	対話スキル学習	対話学習
内容	【低学年】 ○　教科等における対話活動の取出しと振り返り （話し方，聴き方，質問，アサーション，バックトラッキング）	【低学年】 ○　保育園・幼稚園児，地域の高齢者との交流 （交流会，昔遊び，ふれあい給食）
	【中学年】 ○　対話活動の取出しと振り返り （傾聴，バックトラッキング，プレゼンテーション，ワールドカフェ）	【中学年】 ○　地域の福祉・環境にかかわる人々との交流 （交流会，ふれあい給食） ○　外国語を母国語とする方との交流 ※英会話科重点学習での位置付け
	【高学年】 ○　対話活動の取出しと振り返り （ファシリテーション，バックトラッキング，反映的傾聴，ブレーンストーミング）	【高学年】 ○　地域の方との交流 （交流会，ふれあい給食） ○　外国語を母国語とする方との交流 ※　英会話科重点学習での位置付け
		【縦割りグループ】 ○　縦割りグループでの話合い活動 （縦割り遊び，学期ごとのめあて決めと振り返り等）
時数	○　15 分×１回／週（年１１コマ） ※　モジュール ○　45 分×1 回／月（年１１コマ）	●　４５分×１～２回／月 ※　教科内容は，教科の時数に組み込む。 ※　縦割りグループによる地域との対話活動のみカウントとする。（縦割りグループにおける振り返り活動は，行事カウントとする）
形態	各学年一斉及び異学年集団	各学年一斉及び異学年集団

※　アサーション…自分も相手も気持ちを大切にしながらしっかり伝えるコミュニケーションのこと。
　バックトラッキング…相手の言ったこと(事実や気持ち)を返しながら話を聴くこと。
　ファシリテーション…グループの話合いが円滑に進むよう舵取りをすること。
　反映的傾聴…鏡のように相手に反応しながら聴くこと。

③　「ダイアログの時間」と英会話科の関係について

本研究は「英語力」「対話力」の高まった子供の育成をねらいとしている。

そこで，「ダイアログの時間」で学んだ対話スキルを生かすことは，多様な価値観をもつ他者とのコミュニケーションを円滑にすることがで　きると考える。また，英会話科で身に付けたコミュニケーション力を他教科・領域において発揮することは，ダイアログの時間のスキルの定着より一層図ることができる。さらに，英会話科において，「上小英語力５STEPS」を用し，「ダイアログの時間」で学んだスキルを生かしていくにより，これらのスキルの一層の定着を図ることができる。このような関係は，英会話科だけでなく，全教育課程における対話を伴う活動全体にいえることである（図２）。



【図2】ダイアログを基盤とした英会話科，他教科・領域との関係

（２）研究の経過

	実施内容等
第一年次	１　英語力，対話力の向上に向けた，個の学習到達度や学習課題に応じた異学年協働学習に関する研究開発　－Society5.0における求められる力を育成するために－ 英語力，対話力を育成するためのカリキュラムを編成すること ○　各学年で育成すべき資質・能力を明確にする。 ○　その能力を育成するために，新教科「英会話科」，新領域「ダイアログの時間」を位置付ける。
第二年次	新型コロナウイルス感染拡大のため，研究を一時中断
第三年次	２　英語力，対話力の向上に向けた，個の学習到達度や学習課題に応じた異学年協働学習に関する研究開発　－Society5.0における求められる力を育成するために－ 新教科「英会話科」，新領域「ダイアログの時間」の学習を具体化すること ○　年間指導計画等の作成をする。 ○　新教科「英会話科」で課題解決型学習を重視した異学年協働学習を位置付ける。 ○　新領域「ダイアログの時間」の単元ごとの指導案を作成する。
第四年次	３　英語力，対話力の向上に向けた，個の学習到達度や学習課題に応じた異学年協働学習に関する研究開発　－Society5.0における求められる力を育成するために－ 授業実践を通して，「英語力」「対話力」へとつながる児童の姿を集積し，新設教科等における目標及び児童像を具体化すること ○　領域別目標到達度一覧表を作成する。 ○　段階ごとのめざす力に応じた評価指標を作成し，年数回のパフォーマンステストでの評価を実施する。 ○　単元ごとのMY CAN-DOリスト及びそれにリンクした振り返りシートの作成をする。

（３）評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	○　ICTを活用し，個人の学習状況等のスタディ・ログを学びのポートフォリオとして電子化・蓄積し，指導と評価の一体化を図るとともに，児童が自ら活用できるようにする。 ○　段階ごとのめざす力に応じた「聴くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の４技能を測る標準学力調査を実施し，到達度を見取る。 ○　段落ごとのめざす力に応じたルーブリックを教師と児童が一緒に作成し，パフォーマンス課題での評価を行う。 ○　研究の評価については，年間２階の児童アンケートによる自己評価分析，教師，保護者（地域）アンケートによる意識調査分析を行う。
第二年次	新型コロナウイルス感染拡大のため，研究を一時中断
第三年次	○　ICTを利用し，個人の学習状況等のスタディ・ログを学びのポートフォリオとして電子化・蓄積し，指導と評価の一体化を図るとともに，児童が自ら活用できるようにする。 ○　段階ごとのめざす力に応じた「聴くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の４技能を測る標準学力調査を実施し，到達度を見取る。 ○　段落ごとのめざす力に応じたルーブリックを教師と児童が一緒に作成し，パフォーマンス課題での評価を行う。 ○　研究の評価については，年間２回の児童アンケートによる自己評価分析，教師，保護者（地域）アンケートによる意識調査分析を行う。
第四年次	○　段階ごとのめざす力に応じた「聴くこと」「読むこと」「書くこと」の３技能を測る標準学力調査を実施し，到達度を見取る。（５・６年） ○　段階ごとのめざす力に応じた評価指標を作成し，年間数回のパフォーマンステストでの評価を行う。 ○　研究の評価については，年間２回の児童アンケートによる自己評価分析，教師，保護者（地域）アンケートによる意識調査分析を行う。

５　研究開発の成果

（１）実施による効果

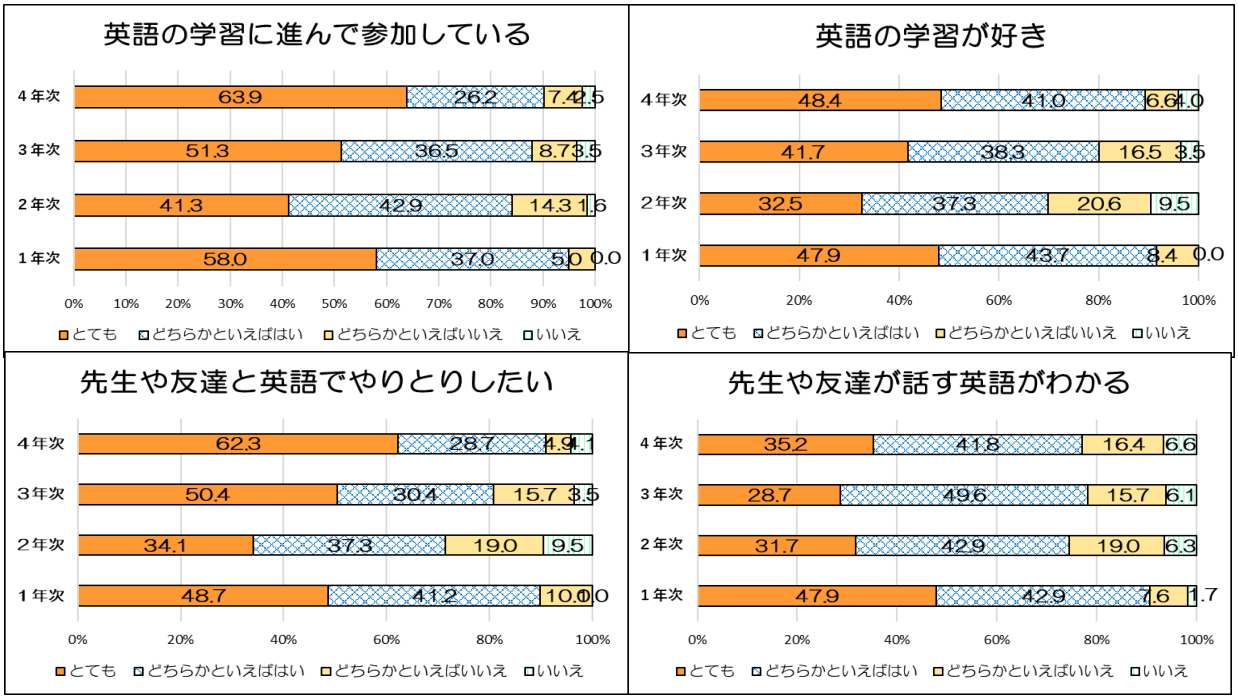
○　子供への効果

【英会話科】

①　子供アンケートの結果から

研究開発に関する子供アンケート（英語力）
実施時期：令和５年７月
対　　象：全子供
評価水準：４段階
（とても＝４，どちらかといえばはい＝３，
どちらかといえばいいえ＝２，いいえ＝１）

・英会話学習への意欲，主体的に取り組む態度



【図３】子供アンケート（英語力）

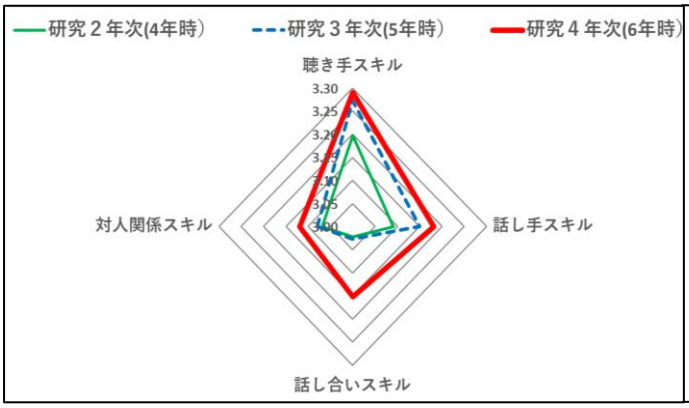
研究１年次から２年次は，４つの項目で肯定的な回答をした子供が減り，意欲面での低下が見られた。これは，コロナの影響で「会話がしにくい」と感じた子供がいたことが要因の一つと考えられる。

２年次から３年次，３年次から４年次にかけては，「英語の学習に進んで参加している」「英語の学習が好き」「先生や友達と英語でやりとりしたい」の項目で，肯定的回答が増加した。これは，評価部が作成した「MY CAN-DO リスト」や「振り返りシート」，教材部が作成した「上小英語力５STEPS」などを活用して子供が個別最適な学び方を経験し主体的に学習を進めたこと，異学年協働学習で子供自ら学び方を調整する経験を経たことが素因の一つとなっていると考えられる。

一方，「先生や友達が話す英語がわかる」という項目は，増加傾向には至らなかった。低学年では，ゲームやクイズを通して楽しみながら英語表現を使う活動が多いが，中学年，高学年と学年が上がるにつれ，言語材料が増え，高度で多様な英語表現が求められる。また，ネイティブの方に英語で説明したり質問に答えたりする言語活動を仕組んだので，「わからない」と感じる子供が増えているものと考える。また，研究の年次が進むにつれて活動の内容のレベルが上がり，うまく対話できずにますます苦手意識を強めた子供もいたと考えられる（図３）。

【ダイアログの時間】

① 子供用対話力アンケートの結果から



研究開発に関する子供アンケート(対話力)

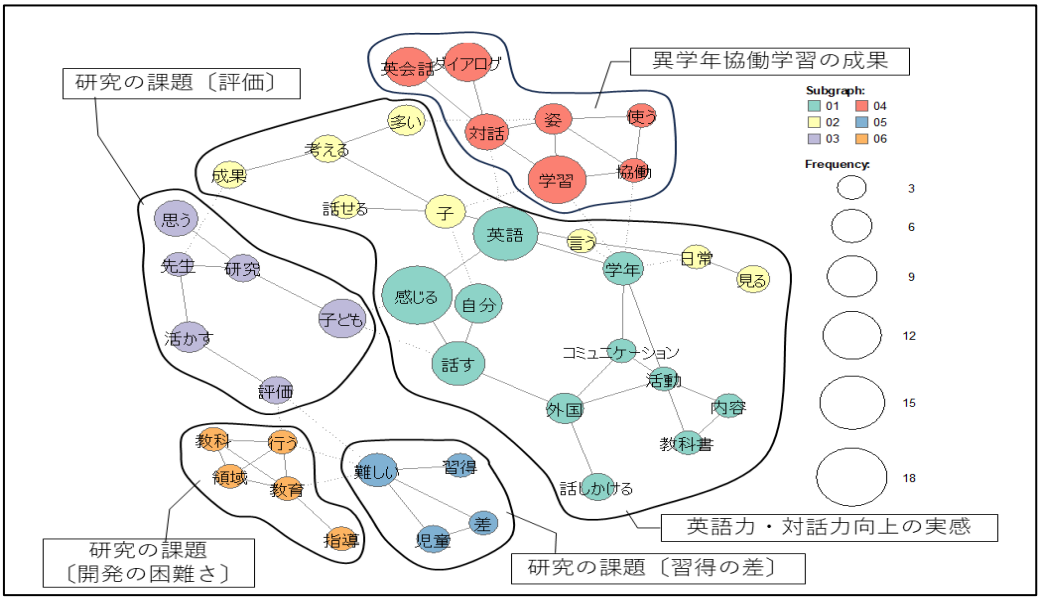
実施時期：計3回
令和4年2月(研究2年次)，
令和5年2月(研究3年次)，7月(研究4年次)
対　象：第6学年子供(4年時，5年時，6年時)
N=23(2年次)，N=23(3年次)，N=24(4年次)
調査項目：全18項目
評価水準：4段階
(いつもしている=4，している=3，
あまりしていない=2，していない=1)

【図４】対話力アンケート（子供）結果

現在の第６学年は，本研究を３年生時から実施してきた子供であり，研究開発における積み上げをより多く積んできた学年といえる。そこで，定期的に行っている子供用対話力アンケートにおいて，第６学年を対象に分析を行った。すると，「聴き手スキル」，「話し手スキル」，「話合いスキル」，「対人関係スキル」の４項目について，学年を重ねるごとにスキルが向上していることが分かった（図４）。

○　教職員への効果

令和５年度教師アンケートの共起ネットワーク



【図５】研究開発に関する職員アンケート

令和５年度の再頻出語は「感じる」であり，頻出度の高い「英語」「話す」と強い共起を示して「英語力・対話力向上の実感」としてサブグラフを形成している。すなわち，研究の成果として他者とコミュニケーションを図る姿が日常化し，物怖じせず話しかける子供が増えてきたことが実感できている。

一方で，課題として「開発の困難さ」「評価」「習得の差」がサブグラフとして表れてる。現行の学習指導要領に拠らない開発研究ゆえの難しさも感じている（図５）。

○　保護者への効果

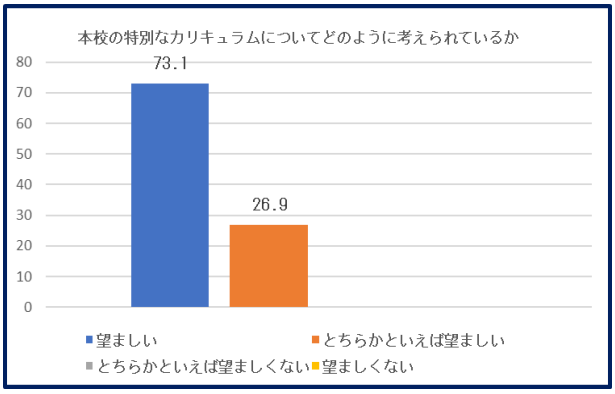
研究開発に関する保護者アンケート

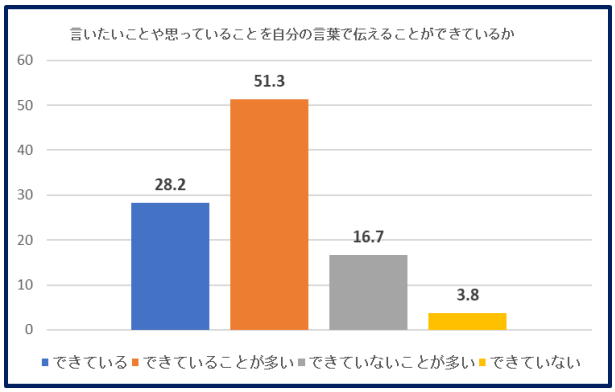
実施時期：令和5年9月

対　　象：全保護者　N=83

調査項目：カリキュラムに関する満足度（4段階），カリキュラムに関しての自由記述

ダイアログの時間の効果（4段階），ダイアログの時間に関しての自由記述





<保護者の意見>

○年齢が早いうちから英語に慣れ親しんでおくと，英語を話すことへの苦手意識や抵抗感がなくなると感じる。実際，子供が学校で学習した英語のフレーズを家で嬉しそうに話し，聞かせてくれる。

○低学年から英語にふれているので，英語が身近なものであるということを自然に受け入れている。

○日本語以外の言語にふれることによって，他国の文化・習慣・考え方等，多様性を感じる機会が増えると感じる。また，新しい知識が増え，世界が広がることにもつながっていると感じる。

<保護者の意見>

○入学当初に比べて，少しずつ自分の気持ちを伝えることができるようになっている。

○自分の気持ちをうまく言葉にして表すことができないときがあったが，この取り組みを通して，少しずつ変わっていっていることを感じる。

○ダイアログの時間で学習している自分の意見を自分の言葉で伝える力が身に付いてきていることを感じる。

●伝えるだけではなく，人の意見や話を聞ける力も身に付けることができるといいなと感じる。

【図６】研究開発に関する保護者アンケート

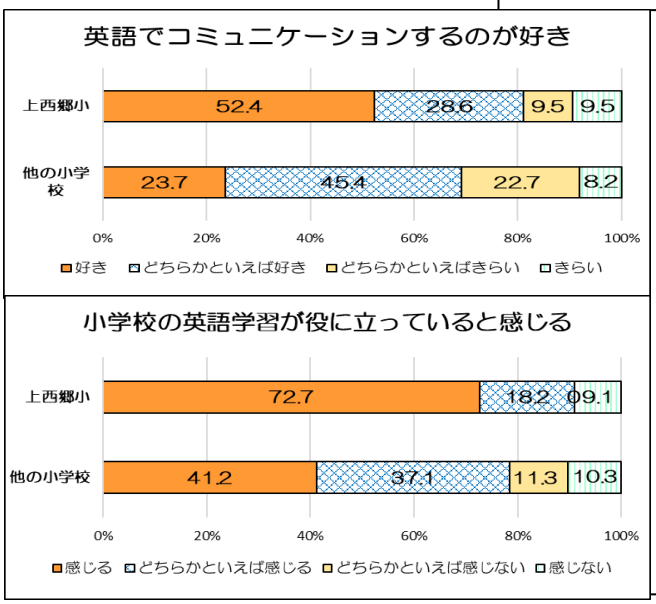
子供達の学習に取り組む様子や家庭での様子から，保護者の方が本校の特別なカリキュラムに関して一定の満足感をもっていることが分かる。また，他校にはない英会話科を低学年から学習することや人間関係づくりに大切なダイアログの時間等，新教科・新領域の意義や意味を感じながら取り組むことに本校のカリキュラムのよさを感じていただいている（図６）。

○　卒業生への効果

研究開発に関する卒業生のアンケート

実施時期：令和５年７月

対象：令和４年度卒業生で福津市立福間東中学校に通っている生徒（現中１）



「英語でコミュニケーションするのが好き」
自由記述

【肯定的な意見】
○　外国に行って話しているみたいで楽しいから。
○　面白いから，言っている意味がわかると嬉しいから。
○　意味が分かれば面白いから
○　しゃべるのが楽しい。
（多数）

【否定的な意見】
○　何を言っているか分からないことが多いから。
○　英語でしゃべったり，聞き取ったりすることが難しいから。

【図７】卒業生へのアンケート

令和４年度の卒業生に対して行ったアンケートによると，「英語でコミュニケーションするのが好き」という項目に対して肯定的に回答した生徒が，他校出身の生徒に比べて多かった（図７）。また，「小学校の英語学習が役に立っていると感じる」という項目では，本校出身生徒の９割以上が肯定的な回答をしており，英語に対する主体性が中学でも継続してもち続けていることが分かる。自由記述からは，「外国に行って話しているみたいで楽しい」「しゃべるのが楽しい」など英語に対して興味関心が高く，やり取りを身近なものと感じていることが分かる。

（２）実施上の問題点と今後の課題

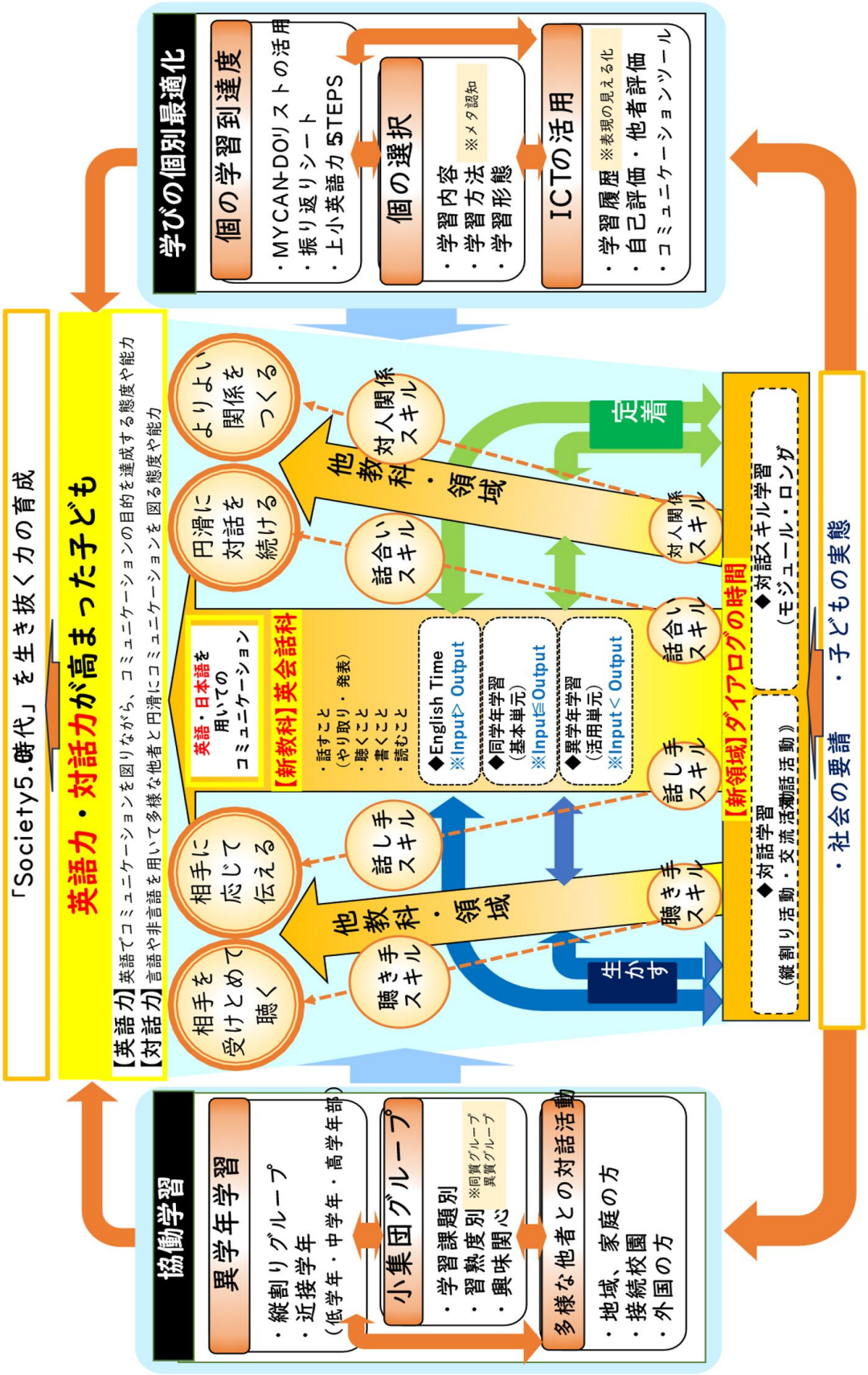
● 簡単な英語であれば自分のことを伝えたり，外国の方の話を聴き取ったりすることは可能であるが，そこからさらに高めることの難しさを感じている。
→中学校英語への接続を検討

● 自分の考えを理由とその根拠を明確にしながら主張するといった論理的思考，表現に関するスキルの習得，発揮は不十分であったと考える。
→国語科、社会科等の中で意識的に指導していく。

● 個の学習到達度について，「なりたい自分像（マイゴール）」が子供の自己評価による目標設定であった。
→学習への意欲やメタ認知能力を向上させ、目標設定をより適切なものにする。

● 異学年協働学習について，隣接学年での学習が主になった。
→６年生による１年生への絵本の読み聞かせ等，今後も適宜機会を作っていく。

○研究の内容（研究構想図）


「Society5.0時代」を生き抜く力の育成
英語力・対話力が高まった子ども
【英語力】英語でコミュニケーションを図りながら、コミュニケーションの目的を達成する態度や能力
【対話力】言語や非言語を用いて多様な他者と円滑にコミュニケーションを 図る態度や能力
学びの個別最適化
個の学習到達度
・MYCAN-DOリストの活用
・振り返りシート
・上小英語力STEPS
個の選択
・学習内容
・学習方法
・学習形態
※メタ認知
ICTの活用
・学習履歴 ※表現の見える化
・自己評価・他者評価
・コミュニケーションツール
よりよい関係をつくる
円滑に対話を続ける
相手に応じて伝える
相手を受けとめて聴く
他教科・領域
対人関係スキル
話合いスキル
話し手スキル
聴き手スキル
定着
生かす
英語・日本語を用いてのコミュニケーション
【新教科】英会話科
・話すこと（やり取り・発表）
・聴くこと
・書くこと
・読むこと
◆English Time
※Input＞Output
◆同学年学習（基本単元）
※Input≦Output
◆異学年学習（活用単元）
※Input＜Output
【新領域】ダイアログの時間
◆対話スキル学習（モジュール・ロンダ）
◆対話学習（縦割り活動・交流活動・活動）
・社会の要請　・子どもの実態
協働学習
異学年学習
・縦割りグループ
・近接学年（低学年・中学年・高学年部）
小集団グループ
・学習課題別
・習熟度別
・興味関心
※同質グループ 異質グループ
多様な他者との対話活動
・地域、家庭の方
・接続校園
・外国の方

【別添１】－別紙２

福津市立上西郷小学校　教育課程表（令和５年度）

	各教科の授業時数										特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	英会話科	ダイアログの時間	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語							
第１学年	258 (−48)		136 (0)		92 (−10)	68 (0)	68 (0)		102 (0)		34 (0)			34 (0)	34 (＋34)	24 (＋24)	850 (±0)
第２学年	245 (−70)		175 (0)		81 (−24)	70 (0)	70 (0)		105 (0)		35 (0)			35 (0)	70 (＋70)	24 (＋24)	910 (±0)
第３学年	210 (−35)	70 (0)	175 (0)	90 (0)		60 (0)	60 (0)		105 (0)		35 (0)	0 (−35)	45 (−25)	35 (0)	70 (＋70)	25 (＋25)	980 (±0)
第４学年	210 (−35)	90 (0)	175 (0)	105 (0)		60 (0)	60 (0)		105 (0)		35 (0)	0 (−35)	45 (−25)	35 (0)	70 (＋70)	25 (＋25)	1015 (±0)
第５学年	140 (−35)	100 (−5)	175 (0)	105 (0)		50 (0)	50 (0)	60 (0)	90 (0)	0 (−70)	35 (0)		50 (−20)	35 (0)	105 (＋105)	25 (＋25)	1020 (±0)
第６学年	140 (−35)	100 (−5)	175 (0)	105 (0)		50 (0)	50 (0)	55 (0)	90 (0)	0 (−70)	35 (0)		50 (−20)	35 (0)	105 (＋105)	25 (＋25)	1015 (±0)
計	1203 (−268)	360 (−40)	1011 (0)	405 (0)	173 (−20)	358 (0)	358 (0)	115 (0)	597 (0)	0 (−140)	209 (0)	0 (−70)	190 (−90)	209 (0)	454 (＋454)	148 (＋148)	5790 (±0)

※ 授業時数の増減について，以下の記号をつけて表中に示す。

（＋）・・・特例により増加して時数　　（－）・・・特例により減少した時数

【別添１】－別紙３

学校等の概要

１　学校名，校長名

学校名　　福津市立上西郷小学校（フクツシリツカミサイゴウショウガッコウ）

校長名　　児島　由美（コジマ　ユミ）

２　所在地，電話番号，ＦＡＸ番号

所在地　　福岡県福津市内殿５９１－４

電話番号　　0940-42-0258

ＦＡＸ　　0940-42-7576

３　学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数，学級数

（小学校の場合）

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
17	1	15	1	17	1	22	1	21	1	23	1	115	6
(1)		(8)		(1)		(2)		(3)				15	特支3

※特別支援学級（知的・情緒）が３学級あり，在籍児童は１５名である（表下段）

４　教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1	1		１１	1	1			3

ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
2		1	1	２３

５　研究歴

- 平成１７年度：福津市教育委員会研究指定校発表会「伝え合う力を育てる国語科学習指導」
- 平成２１年度～２３年度：「県人権尊重の学校づくり」指定校
- 平成２５年度：コミュニティスクール研究発表会
- 平成２８年度：コミュニティスクール研究発表会
- 令和元年度～令和５年度：文部科学省研究開発学校指定